

Ⅳ 野 菜

1. トマト

(1) ウルバーナ (Urbana)

来歴 米国イリノイ農試で育成されたもので、その経過は詳かでないが、1950年頃ルイジアーナピンク、ブリッチャード及びイリノイ育成系統などが交配親として使われたものと考えられている。1957年小林泰氏（北海製缶株式会社缶詰研究所主任）により導入され、試作の結果有望と思われたので1962年以来各農試で試験を行い、1965年（昭40）優良品種に決定し原名から「ウルバーナ」と命名した。

特性概要 1. 熟期は早生の晩に属し、稚苗期の草勢は旺盛で芯止り性であるがその程度は弱い。

2. 果形は扁円球、大きさは中(平均100g 前後)、ひだの発生は稀で花痕は小さい。へたばなれは中位、硬さは軟かい方である。

果色は濃紅色でジュースの色調も良い。

3. 裂果や日焦の発生は多い方に属する。

4. 耐病性、疫病に対しては中位である。

栽培適地と奨励態度 道中央部以南および上川、留萌管内や富良野盆地に準ずる気象条件の地帯。

本種は芯止り性が強くないので肥沃条件下では茎葉が繁茂し、結実低下、疫病の発生をうながすので、施肥特に窒素の過用はつつしむこと、無支柱栽培の場合は排水の良いほ場をえらび畦巾120cm、株間45cmを基準とし、播種期は3月末～4月上旬とすること。

試験場名	草 状		開 花 始	収 穫 始	収 穫 終	収量(10株)		1個平均重	搾汁率(%)	
	高 さ	拡がり				早 期	全 期		対原重量	対調整量
中央農試	47.9	57.9	6.11	8.15	9.21	11.00	27.87	86.2	85.7	93.3

試験場名	ジ ュ ー ス 成 分						
	全 固 形 物	可溶性固形物	還元糖	総 酸	アミノ態 N	pH	BX
中央農試	5.71	5.02	3.13	0.51	55.9	4.3	6.4

注 搾汁率、ジュース成分は1965年（昭40）9月3日調査
 その他は1963年～1965年3ヶ年平均

〔1979年（昭54）廃止〕

(2) ファイアボール (Fire ball)

来歴 米国 Harris Seed Co. が1952年(昭27)育成した早生、早期多収型の無支柱栽培向け加工用品種である。1962年(昭37)北海道立農業試験場がカナダから導入し1963年(昭38)以降試作し、1965年(昭40)農業試験会議に提出したが、加工特性の味の点で難があるとされ保留となった。1966年(昭41)再検討の結果、問題となった異臭は決定的なものでないので1966年(昭41)優良品種に決定し原名から「ファイアボール」と命名した。

特性概要 1. 熟期は早生に属し、草勢は、初めは旺盛で7月中～下旬までに草体の大きさはほぼ決定し芯止り性が強く概ね3花房で生長点が止る。

2. 葉はやや黄緑色を呈し、小さくやや盃状に湾曲する。後半、着果成熟期に達してから、側枝の発生、伸長がなく、草勢衰え果実が裸出する。

3. 果実は100g前後着色の良いユニフォームグリーンで、朱赤色扁球形、多少浅いひだを生ずる。着花状態は芯止り性のため、株の周辺に近く集まり収穫作業はしやすい。

4. 耐病性、多湿の時は生理的腐敗果を生じ易く、軟腐病におかされやすいが、疫病に対しては薬剤防除で回避出来る。

5. 耐肥性あり、多肥への反応がにぶく、施肥上の失敗は少く作りやすい。

栽培適地と奨励態度 収穫、加工期間の増幅をはかるためウルバーナと配合作付する。

芯止り性が強いので畦巾100～120cm—株間30～40cmの密植とし、肥料もやや多肥とする。

試験場所	草 状		開 花 始	収 穫 始	収 穫 終	収量(10株)		1 個 平均重	搾汁率(%)	
	高 さ	拡がり				早 期	全 期		対 重	対調整量
中央農試	39.8	73.0	月日 6.5	月日 8.13	月日 9.21	kg 15.26	kg 26.10	g 95.6	87.3	91.9

試験場名	ジ ュ ー ス 成 分							BX
	全形	固物	可溶性固形物	還元糖	総酸	アミノ態N	pH	
中央農試	5.60	4.97	2.66	0.45	55.9	4.4	6.1	

注 搾汁率、ジュース成分は1965年(昭40年)9月3日調査

その他は1963年～1965年3ヶ年平均

[1979年(昭54)廃止]

(3) あかぎ

来歴 東京シード(株)において、極早生で耐病性が強く、栽培容易な品種を目標に、「市原早生」の中から2系統を選んだ。さらに早生で低温伸長性が強く、悪天候にも鈍感で、花数が多く、着果のよい品種という点から、東北地方で栽培されている「スペシャル・アーリー」から2系統を選んだ。そしてダブルクロス方式によって1959年(昭34)に「あかぎ」を育成した。北海道農業試験場で1969年(昭44)～1971年(昭46)の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は旺盛で、根張りよく、厳寒の候に育苗しても低温伸長性強く、外気の変動にも耐える。

2. 一般的に極早生種はイチョウ病、スジグサレ病がしやすいが、本種は根張りがよいので、こ

れら根からくる病気にも強く、また巻き葉になる性質があるので、密植しても光線をよく透し、通風もよいので、ハカビ病の発生も少ない。

3. 熟期は「宝冠1号」などとはほぼ同様、極早生トップクラスに属し、「福寿2号」「ひかり」より4～5日は早い。

4. 果実の発育、肥大、着色が早く、収穫が始まれば連続的に収穫でき、くず果がひじょうに少なく、したがって初期収量がきわめて多い。

5. 果の大きさは平均200g以上、早生種としては大型のほうで、第1段から4～5個着果し引き続き4～5段まで大玉を着生する。

6. 果形はやや腰高の豊円でよく整い、花痕部、へた部とも小さく、ひだが少なく、ホルモン処理による変形も少ない。

7. 果色は光沢のある桃紅色で、へた部の近くまでよく色づき、果肉がしまって厚く、種の部分が少ないことも本種の特長で、料理用に薄く切っても果肉のくずれることが少ない。

8. 土壌適応性はかなり広く、一般早生種に比べ、着花力が旺盛で、果実の肥大が早く、生殖生長型の品種であるから、多肥栽培を必要とする。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によって適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房	第2花房	第3花房	第1花房	第2花房	第3花房	早期	全期				
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	kg	kg				
北海道農試	4. 19	4. 28	5. 9	6. 20	7. 2	7. 11	391	717	65. 0	3. 2	28. 5	1969～1970

[1979年(昭54)廃止]

(4) 宝冠1号

来歴 「宝冠1号」は武蔵野種苗(株)において、促成、早熟栽培むき品種育成を目標にスペシャル・アーリー群に属する1系統と、アーリー・ピンク群に属する1系統からえた一代雑種である。1956年(昭31)命名、1957年(昭32)より発表された。北海道農業試験場で1969年(昭44)～1971年(昭46)の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. ハウス促成用極早生種で巻葉になる性質を有する。着果力旺盛で果実肥大が早い。

2. 果形はやや腰高でヒダがなく濃いピンクで独特の光沢がある。1果平均重は142gでやや小に属し、上物率はやや高い。

3. 収量性はやや不安定である。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房	第2花房	第3花房	第1花房	第2花房	第3花房	早期	全期				
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	kg	kg				
北海道農試	4. 19	4. 29	5. 10	6. 21	7. 2	7. 13	399	670	50. 4	3. 6	28. 1	1969～1970

(5) 新豊紀

来歴 「新豊紀」はマヤト種苗㈱において、早出し、とくにトンネル栽培用品種の育成を目標に選抜された早生品種間の一代雑種である。1957年（昭32）から発売された。北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.ハウス促成用、極早生で初期生育は旺盛。

2.果色は桃色でへたの周辺はやや緑が残る。果実はやや腰の低い扁円形で玉揃は良い、果実の大きさは143gでやや小に属する。

3.収量はやや安定しているが、時に肥大不良花房の発生することがある。

栽培適地および奨励態度 1.道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2.道東においても、ハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	腐敗果率	試験年次
	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 19	4. 29	5. 9	6. 22	7. 3	7. 13	337	699	59. 5	2. 9	28. 5	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(6) 豊 緑

来歴 「豊緑」は坂田種苗㈱において早生大玉の萎ちょう病抵抗性品種の育成を目的に、米国より導入した「ピアソン、FR」から市場性を中心に抵抗性親系統を選抜、さらにF₁の組合せ能力検定を行えられた「大玉ジュンピンク」の1系統との一代雑種である。1967年（昭42）発表されたものを、北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.ハウス促成用早生種で草勢は強い。

2.果色は濃く、平均1果重は145gで中位、扁円形で上物率はやや高い。

3.収量性は安定している。

栽培適地および奨励態度 1.道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2.道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 20	4. 30	5. 11	6. 24	7. 4	7. 16	326	744	60. 9	6. 1	44. 9	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(7) スーパーキング

来歴 ヤマト種苗㈱で、萎ちょう病抵抗性品種を目的に育成された。

北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）の間ハウス促成栽培用適品種選定試験

に供試し1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は中からやや強に属し、葉は大きい。

2. 第1～第2花房の着花は良好で果の揃いもよく肥大性は良好である。第3花房でも着花がよい。1果重は180g前後で中である。

3. 熟期は早～中に属し、上物率が高く収量は安定している。

4. 萎ちょう病には抜群の抵抗性を持ち夏疫病、ウイルス、青枯病にも比較的強い。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	腐敗果率	試験年次
	第1 花房 月日	第2 花房 月日	第3 花房 月日	第1 花房 月日	第2 花房 月日	第3 花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 20	4. 29	5. 10	6. 22	7. 3	7. 8	342	736	61. 3	3. 4	41. 2	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(8) 早生だるま

来歴 本品種は松永種苗㈱で育成されたものであるが、来歴については未発表である。道内には1972年（昭47）から試作された結果、1977年（昭52）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 苗の生育は「ウルバーナ」なみの強い草勢を示し、定植後も同様である。芯止り性は強く、有効分枝が多いため早期の着果が良好である。枯葉期もおそくリーフカバーも良好である。初収穫は「ウルバーナ」より10日程度早く「ファイヤボール」なみである。

2. 特に耐病性は持たないが、病害には強い方である。

3. 着果は早期から安定しており、早生のため前期から全期間を通じて多収である。特に低温年でも未熟果は少なく有効果割合が高い。さらに圃場での腐敗果数は「ファイヤボール」より少ない。

4. 1果重は80g前後でやや小果であるが、赤色球形で外観は良好である。裂果も少なく果肉の色調はすぐれ、加工適正は良好である。果実は堅く運搬中のロスも少ない。

5. 総じてやや小果だが、早熟多収品種である。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。苗時代から草勢が強いので密植にならぬように注意するとともに、定植後は特に耐病性はもっていないので栽培後半の防除に十分注意し、収穫労力節減のため収穫は7～10日毎でよい。

試験場所	収穫始 月日	前期収量 kg/a	全期収量 kg/a	前/全期 %	1果重 g	腐敗果率 %	裂果 発生程度 %	糖 度 %	試験年次
中 央 農 試	8. 3	141	947	14. 9	69	11. 5	9. 2	4. 5	1972～ 1976
北海製缶研究所	8. 15	123	598	20. 6	62	20. 3	6. 6	—	1975

(9) 交1号(交1号)

来歴 北海道農業試験場(作物第2部)で、1963年(昭38)から1968年(昭43)の間に19品種、15組合せの一代雑種について検討した結果、「ウルバーナ」×「ファイヤボール」の一代雑種を選抜し、「交1号」の系統名で道内各地で生産力検定試験を行い、1977年(昭52)優良(準奨励)品種に決定し「交1号」と命名した。

特性概要 1. 苗の生育は「ウルバーナ」なみの強い草勢を示し、定植後も生育は良好である。は種から開花までの日数は「ウルバーナ」より4～5日早く、ほぼ「ファイヤボール」なみである。芯止り性は強いほうで、早期の着花がよい。開張度は「ウルバーナ」と「ファイヤボール」のほぼ中間型を示すが、リーフカバーは良いほうである。初収穫は「ファイヤボール」なみか、1日ほど遅れるが、「ウルバーナ」より7～8日は早い。

2. 特に耐病性はもたない。

3. 着花が早期から安定しているので前期収量が高く、枯葉期が遅いため後期の収量も落ちず多収である。早生種のため低温年でも未熟果が少ないが、やや圃場での腐敗が多い。

4. 1果重は100g前後で中果種である。果実外観は良好で、堅さ、肉色、糖度と果実形質は「ウルバーナ」なみである。裂果は初期では少ないが後期になると「ウルバーナ」よりやや多めとなる。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。特に耐病性を持っていないので、育苗後半から病害の防除に注意する。

試験場所	収穫始 月日	前期収量 kg/a	全期収量 kg/a	前/全期 %	1果重 g	腐敗果率 %	裂果 発生程度 %	糖度 %	試験年次
北海道農試		147	547	30.0	94	21.5	—	—	1964～ 1969
中央農試	(8.10)	173	820	21.1	107	18.1	25.0	4.5	1968～ 1976
北海製苗研究所	8.15	102	301	33.9	115	44.0	32.1	—	1974～ 1978

注 ()は1976年1ヶ年の成績

(10) れいぎよく

来歴 1964年(昭34)から1968年(昭43)の間に、長野県農業試験場桔梗ヶ原分場で交配したF₁の中から選抜されたものである。この系統は中部高冷地における栽培を主体に、既存の「H1370」のもつ繁茂性を少なくし、かつ早期多収であり、極早生種の「ファイヤボール」などのもつ環境感受性をなくし、さらに既存品種にくらべ収量、果実の品質などともに劣らないことを目標に選抜されている。母品種は1963年(昭38)農家圃場で発見された品種不明の1優良株からの選抜系であり、父品種は「くりこま」、系統名は「桔交416」である。道内では1969年(昭44)より系統適応性検定試験を行い1970年(昭45)に「れいぎよく」と命名された。1977年(昭52)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要1. 苗の生育は「ウルバーナ」「ファイヤボール」なみの草勢を示すが、定植後は中間型の草勢を示す。着花は安定しており、年による差が少ない。芯止り性は強いが、リーフカバー

は良好である。初収穫は「ウルバーナ」より5～7日は早く早生種であるが、「ファイヤボール」よりやや遅い。

2. 葉に発生する病害に対しては特に耐病性を持たないが、萎ちょう病に対しては抵抗性を持っている。

3. 初期収量は「ファイヤボール」よりやや劣っているが、全期収量では「ウルバーナ」「ファイヤボール」より多収である。圃場での腐敗は「ファイヤボール」なみである。

4. 果実は赤色球型で1果重は120g前後である。外観は良好で裂果の発生が少ない。堅さはいく分軟らかいが果肉の色調がすぐれ、糖度が高いため加工適性は良好である。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。苗の草勢が比較的強いので密植にならぬようにし、定植時の植傷みがないよう努め、マルチ栽培とする。定植後の草勢は強いが、成熟始期頃からやや弱くなりがちなので、草勢の低下を防止する。

試験場所	収穫始	前期収量	全期収量	前/全期	1果重	腐敗果率	裂果発生程度	糖度	試験年次
	月日	kg/a	kg/a	%	g	%	%	%	
中央農試	(8.10)	156	848	18.4	117	20.7	12.7	4.6	1969～1976
北海製缶研究所	(8.15)	148	670	22.1	128	14.1	29.6	—	1973～1976

注 () 1975年1ヶ年成績

2. キュウリ

(1) 長日青節成

来歴 「長日青節成」はヤマト種苗㈱で育成された品種で、1969年(昭44)～1971年(昭46)まで北海道農業試験場で促成用栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は強く、黒イボ系に属し、果長は中位、果色は緑色である。

栽培適地および奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始	収穫始	7月16日		7月31日	総収量 (10a当り)	屑果収量 (10a当り)	病害	品質	試験年次
			草丈	葉数	匍枝数					
	月日	月日	cm	枚	本	kg	kg			
北海道農試	5.20	6.5	188.5	21.7	6.8	13.273	1.023	少	中	1969～1971

[1979年(昭54)廃止]

(2) 久留米落合H型

来歴 「久留米落合H型」は久留米原種育成会で「久留米落合」を母とし、「日向改良系」を父

として組合せた一代雑種である。1969年（昭44）～1971年（昭46）まで北海道農業試験場で促成栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性の概要 草勢は強く、黒イボ系に属し、果長は長く濃緑色、側枝の発生は少ない。

栽培適地と奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始 月日	収穫始 月日	7月16日		7月31日	総収量 (10a当り) kg	屑果収量 (10a当り) kg	病害	品質	試験年次
			草丈 cm	葉数 枚	側枝数 本					
北海道農試	5. 22	6. 1	188. 7	21. 7	5. 8	11, 874	189	少	上	1969～ 1971

〔1979年（昭54）廃止〕

(3) 夏埼落3号

来歴 「夏埼落3号」は埼玉県園芸試験場で育成された品種で耐寒性の強い春キュウリ（「房成り性日向系」×「埼落」）×「埼落」の固定種を父として、12月播種で選抜を重ねた白イボ夏キュウリを数回戻し交配し、このなかから葉型、草姿ともに黒イボ系に類似した白イボ系を選出した品種である。1965年（昭40）命名され1969年（昭44）～1971年（昭46）まで北海道農業試験場で促成栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 葉は中位、茎太く、節間はややつまる。

2. トゲの小さい白イボで、鮮濃緑色で他品種と異なりてりがある。

栽培適地と奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始 月日	収穫始 月日	8月24日		7月31日	総収量 (10a当り) kg	屑果収量 (10a当り) kg	病害	試験年次
			草丈 cm	葉数 枚	側枝数 本				
北海道農試	9. 2	9. 11	130. 0	10. 5	—	457. 7	171	—	1970年、抑制栽培
	5. 6	5. 18	—	—	—	673. 9	—	—	1970、促成(加温試験) 栽培

3. イチゴ

(1) 盛岡16号

来歴 「盛岡16号」は、園芸試験場盛岡支場において、冷涼地の多年省力栽培に通ずる品種を育成するために、1960年（昭35）に米国種13品種と、我が国の11品種系統の間で交配を行い、多年栽培適応性、果実形質、耐病性などを主な選抜基準として選抜を続け、その中の「2—8」（Fairfax×Ettersburgの交配実生より選抜した系統）×「千代田」の交配実生より選抜した。1969年（昭44）より、北海道農業試験場・北海道立中央農業試験場（指定試験事業）において、

適応性の検定を行った。1973年（昭48）優良品種に決定した。

特性概要 1.草姿は立性で草勢、分株数、ランナー発生は「幸玉」と同程度か、やや多い。葉は杯状でやや淡緑色である。結果習性は、1花房あたり4～7果で少果数型である。

2.熟期は「ダナー」よりやや遅れ、「幸玉」と同程度か幾分早い中生である。少果数型のため、収穫の終期は「幸玉」より早い。

3.1年目の収量は中位であるが、2年目の収量は多い。1番果は30g以上の大果となるが果型はくずれない。平均果重は、「幸玉」「ダナー」「宝交早生」に比べ大きく、収穫末期にも大果を着け、屑果が非常に少ない。

4.果型は円錐～やや長い円錐型の大果で、果色鮮紅色で外観が美しい。果肉着色は淡いが空洞が少ない。糖度高く、食味は甘酸適和して、極めて美味である。また、果実が堅く、日持ち・輸送性が、「ダナー」と同程度以上に良好である。加工性も良い。

5.果実の腐敗は極めて少ないが、茎葉の病害には強い方ではない。

栽培適地と奨励態度 本道における露地生食用中生種として優良な品種であり、またトンネル、およびハウス栽培にも有望である。なお、特にその果実特性から輸送地帯での栽培に、より適していると考えられる。

栽培にあたってはウィルスやセンチュウの被害のない健全苗を導入する。少果数型であることから収穫1年目株の花数を確保するため、育苗を充分に行い、大苗を養成する。収穫2年目株の収量が多く安定することから、栽培管理に十分注意して、2～3年株の利用も考える。茎葉病害および、乾燥に弱い傾向が認められるので注意する。

試験場所	草丈 cm	葉数 枚	10株当収量		1果平均重 g	糖度	試験年次
			個数	重量 g			
北海道農試	—	—	171	1,250	7.3	—	1970
中央農試	27.9	11.7	66	807	12.2	10.4	1972

(2) ホレラ (Gorell)

来歴 「ホレラ」はオランダワゲニンゲン園芸試験場で「ジャスバ」(「Juaurda」×「Sparkle」)を母とし「MdUs3763」を父として育成された品種である。1965年（昭40）北海道農業試験場で同場から分譲を受け、1966年（昭41）から栽培、品種比較を行った結果、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定し、原名から「ホレラ」と命名した。

特性概要 1.草姿は立性で、草勢は強ランナーの発生は中位で、葉面大きく、葉柄は短くややコンパクトタイプに属する。

2.熟期は「幸玉」なみの中生である。

3.収量は1年目、2年目ともに多収を示す。

4.果型は楕円形の大果で、果色やや鮮紅色で果面が美しく、堅くて日持ちが良く、収穫後期になっても、小果になり難い。食味は甘酸適和して、極めて美味である。加工適性も良い。

栽培適地と奨励態度 本道における露地生食用中生種として適す。

栽培にあたってはウィルス病、センチュウの被害のない健全苗を導入する。ランナーの出は

中位なので採苗用の圃場で母本の養成が必要である。多収品種なので有機質肥料の使用は必ず行うこと。

試 験 場 所	収 量 (12株当り)					
	1 年 株 (1969年)			2 年 株 (1970年)		
	重 量 kg	個 数 個	1 果平均重 g	重 量 kg	個 数 個	1 果平均重 g
北 海 道 農 試	2.640	315	8.4	2.291	333	6.9

[1979年(昭54)廃止]

4. タマネギ

(1) オータムブライド

来歴 アメリカ合衆国アイダホ州 Crookham.Co. で1961年(昭36)育成した雄性不稔利用一代雑種である。親系統の由来については発表されていないが、両親系統とも「Downing Yellow Globe」「Brigham Yellow Globe」あるいは「Iowa Yellow Globe」などの品種属に属するものと思われる。「Experimental Hybrid No. 4」の仮名により5年間検討された後、1966年(昭41)「オータムブライド」と命名されて発売された。道内では北海道農業試験場で1962年(昭37)より導入試作を行った。1972年(昭47)で優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 種子は小粒だが重く「札幌黄」と大差はない。容積重は非常に重い。発芽は遅く、苗の生育も若干遅れる。夏期は遅くまで生育するので、葉数は多く、首部は太く、球型は地球型で「札幌黄」よりいく分甲高である。

2. 耐病性は葉のボトリチス性葉枯病には強い。その他の病害にはやや弱いと思われる。

3. 倒伏期は「札幌黄」より一週間程度遅れるが、揃いはよい。

4. 総収量は「札幌黄」より多いが、規格内収量はやや低い。

5. 規格外の発生は「札幌黄」と同等で、玉揃いは非常に良い。

6. 栽植密度に対する反応は「札幌黄」とほぼ同等である。

7. 貯蔵後の品質は「札幌黄」よりもすぐれている。

8. 貯蔵中の重量減は非常に少ない。また貯蔵中の腐敗や萌芽によるロスも少ない。萌芽期は「札幌黄」より1ヵ月程遅いようである。

栽培適地と奨励態度 石狩、空知地方の移植栽培に適する。その他の地方、あるいは直播栽培でも可能であるが、異常天候の年には危険である。未調整のバラ貯蔵、機械による取扱い、後期出荷の場合に特徴を発揮する。定植開始期を3～5日遅らせ、窒素肥料を減量して生育遅延をさける。病害防除は「札幌黄」よりも遅くまで続けること。

試 験 場 所	倒 伏 期	抽 苔 率	規 格 内 球 重	規格内比	球形指数	病 害 率	貯 蔵 中		試験年次
							腐敗率	発 芽	
	月日	%	kg/a	%		%	%	%	
北海道農試	9. 3	1. 04	568	83. 4	104. 0	4. 5	1. 07	12. 49	1963～ 1970

(2) 北見黄（札幌黄「上常呂系」）

来歴 1973年（昭48）より北海道立北見農業試験場で、道内各地で栽培されている「札幌黄」の系統を収集して比較試験を行い、網走管内に適する良質多収、高貯蔵性系統として「上常呂系」を選抜した。「上常呂系」は北見市上常呂玉葱振興会が、1965年（昭40）滝川市小谷一夫氏の自家採種による「小谷系」を移入し、その後同系統あるいは他系統を再移入することなく、集団選抜により系統維持に努めてきたものである。1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定し、「北見黄」と命名した。

- 特性概要 1.倒伏期は「黒川系」より3日程度早い、北見地方の在来系統とは差がない。
 2.規格内球重は「黒川系」より約10%の多収を示す。
 3.規格内比は高く、球色は良好で皮むけし難い。
 4.球形指数大きく、「札幌黄」の理想的球形に最も近い地球型である。
 5.圃場腐敗が少なく、軟腐病罹病率も比較的低い。
 6.貯蔵性に優れているが、長期貯蔵の場合、発根、萌芽率が高くなる傾向がある。
 7.不時抽苔は少ない。

栽培適地と奨励態度 適地は網走管内のタマネギ栽培地帯とする地域限定品種である。栽培に当っては現行の栽培基準に従う。現在網走管内で栽培されている系統の中には、「北見黄」と遜色のないものもあるが、収量性、品質、貯蔵性等で本系統より劣るものが多い。従って管外からの系統を含め、現在網走管内で栽培されている大部分の系統におきかえて栽培を奨励し、品質、規格の統一を図る。

試験場所	倒伏期	抽苔率	規格内球重	規格内比	球形指数	腐敗率	貯蔵中		試験年次
							腐敗率	発根萌芽	
北見農試	8.13	1.8	463	87.3	91.4	11.6	6.8	15.9	1973~1975

5. 食用ユリ

(1) 北海白百合（空系1号）

来歴 「北海白百合」は北海道立農業試験場空知支場で1959年（昭34）AO No.5（岩見沢市の阿波加氏が「大葉百合」×「角田百合」で育成したもの）を母とし、「角田百合」（芦別産）を父とした人工交配により約400粒の種子を生産し、同年秋播種、1960年（昭35）約300球を生産した。1961年（昭36）肥大率良好な12個体を選抜りん片増殖を行った。1962年（昭37）から生産力検定試験を行い、1965年（昭40）優良品種に決定し、「北海白百合」と命名した。

- 特性の概要 1.発芽は「在来種」に比べ1週間内外おそく着蕾、開花も10~14日おそい。
 2.草状はやや短く、葉はやや細く長く密に着生している。
 3.球根は扁球形純白で、分球が少なくりん片幅広く厚く栗状で数は少なく、肥大著しくしまりは良好である。

4.木子の着生量はやや多い。

栽培適地と奨励態度 道内一円の百合栽培地帯に適する。

栽培にあたってはウイルス病の感染防止につとめることと、木子の生育末期の萌芽し易い点、あるいは湿地で栽培した場合はりん片に亀裂を生じ易く、それから尻ぐされ状を呈しやすいので注意が必要である。〔1979年（昭54）廃止〕

試 験 場 所	萌芽期	着蕾期	摘蕾期 草 丈	葉 数	10a 当 り				1 球重量	試験年次
					球 数	重 量	木子着数	木子重		
	月日	月日	cm	枚	個	kg	個	g	g	
空 知 支 場	5. 19	7. 21	90. 4	123	8, 333	1, 210	694	333	151. 2	1964

V 花 卉

1. 花ゆり

(1) ホノオ（交配1号）

来歴 「ホノオ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場（種芸部）で「あかひらと」を母、「おくきんぶんせん」を父として交配、1952年（昭27）播種、1953年（昭28）開花、1957年（昭32）選抜りん片繁殖、1960年（昭35）優良品種に決定し、「ホノオ」と命名した。

特性概要 1. 開花期は7月下旬、花期間は15～20日間、蕾は紡鐘形で僅かに彎曲、全面に白毛有り、花色は朱紅色、僅かに芳香あり、花の大きさ10cm位、斜め下向に咲き、花卉は強く反転、花卉の斑点は多い。花梗は長いものは8cm位で総状花序で20輪以上の花を着ける。葉は披針形で濃緑色で光沢はなく着生はやや斜め上向、葉数は90～100枚位、茎はかたく多角形で紫褐色、高さ100cm位、種球の小さい場合は地下茎が匍匐する傾向がある。珠芽は着生しないが木子は4～5個着生する。球根は純白色で球～扁球型、りん片は擬宝珠～広卵形、りん片の抱合、球のしまり良好。用途として国内、国外向け花壇用、切花用として利用出来る。

ウイルス、ボトリチスには強くないので防除が必要である。

栽培適地と奨励態度 道内の軽い土壌（砂質土、火山灰土）での栽培が望まれる。〔1972年（昭47）廃止〕

(2) ハゴロモ（交配2号）

来歴 「ハゴロモ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場（種芸部）で「あかひらと」を母、「おくきんぶんせん」を父として交配し、1952年（昭27）播種、1953年（昭28）開花、1957年（昭32）選抜りん片繁殖、1960年（昭35）優良品種に決定し、「ハゴロモ」と命名した。

特性概要 1. 開花期は7月下旬～8月上旬、花期間は15～20日間、蕾は紡鐘型で白毛が密生。花色は朱紅色で芳香が僅かにある。花の大きさは11cm位、斜め下向咲、花卉の反転はかるい。斑点は紫黒色で花卉の基部に集中している。花序は総状花序、花梗は10cm位で白毛がある。花数は30輪位、葉は披針形で緑色、やや光沢があり、水平に着ける。葉の裏側に白毛がある。葉数は110～130枚位、茎はかたく多角形の緑色、但し頂端と基部は紫褐色を帯び、頂端部に白毛がある。高さは100～120cm位、小球の場合は地下茎が匍匐する傾向が強い。珠芽はつかないが木子は4～5個着生する。ウイルスには強いがボトリチスには侵されるので防除は必要である。草勢が強いので栽培は容易である。

栽培適地と奨励態度 道内の軽い土壌（砂質土、火山灰土）で栽培が望まれる。〔1979（昭54）廃止〕

(3) 岩内透 1 号 (99号)

来歴 「岩内透 1 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査し、1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 1 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上旬「えぞすかしゆり」としては早生である。草丈60cm位、花色は紅色で花弁はやや反転し、花弁の斑点はやや多い。花梗は短く、花は上向に数輪付ける。茎葉の毛は少いほうで、葉の形状は細く数が多いほうで水平に付ける。ボトリチスに対しては(えぞすかしゆり)では強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(4) 岩内透 2 号 (30号)

来歴 「岩内透 2 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験場)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 2 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上中旬、「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈80cm位、花色は紅色で花弁は反転しないコップ状に咲く、花弁の斑点はやや多く、花梗は比較的長い。茎葉の毛は少なく、葉の形状は細く、数多く水平に付ける。ボトリチスに対しては「えぞすかしゆり」の中ではやや強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(5) 岩内透 3 号 (146号)

来歴 「岩内透 3 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 3 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上中旬で「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈70cm位、花色は鮮紅色で花弁は反転せずコップ状に咲く、花弁の斑点は比較的少く、花梗はやや長い、葉はやや広く短く上向に付いている。ボトリチスに対しては「えぞすかしゆり」の中ではやや強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1979年(昭54)廃止〕

(6) 岩内透4号 (10号)

来歴 「岩内透4号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験場)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透4号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月中旬「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈60cm位、花色は橙紅色で花卉は反転せずコップ状に咲く、花卉の斑点はやや少い。花梗はやや長く葉はやや広く上向で数は少ない。葉色は淡緑である。ボトリチスに対しては弱いようである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(7) 大井 (岩宇3号)

来歴 「大井」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「上重代」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜し、「504」の系統名でりん片増殖、1961年(昭36)より「岩宇3号」として特性を検討した。1966年(昭41)優良品種に決定し、「大井」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は橙色で花卉の斑点は中位、花径は15cm内外で稍々大輪で上向に咲く、花卉は僅かに波状を呈す。草丈50cm位、葉数50～70枚位、茎は剛く、基部で淡紫赤色である。木子の着生は極めて少ない。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(8) 神恵 (岩宇5号)

来歴 「神恵」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「黄透」を父として交配。1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜し、「661-1」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より岩宇5号として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「神恵」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は朱色で花卉の斑点は中位、花径は16～17cm位で大輪、上向に咲く、花卉は稍々波状を呈す、草丈40cm内外で、葉数50～70枚位、茎は剛く、基部は淡紫赤色である。木子の着生は少い。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること、ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(9) 雷電 (岩宇8号)

来歴 「雷電」は、1954年(昭29)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「金武扇」を父として交配、1955年(昭30)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「1019」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より「岩宇8号」として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「雷電」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花色は朱色で花卉の斑点は少々多い、花径は15cm内外で少々大輪、花梗は長く上向に咲く、蕾の毛が多い。草丈60cm内外で、葉数は60枚位、葉の巾が広い。木子の着生は普通である。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(10) 積丹 (岩宇9号)

来歴 「積丹」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「黄透」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「1009」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より「岩宇9号」として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「積丹」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は橙色で花卉の斑点は少ない。花径は16cm内外で大輪、上向きに咲き、草丈は50cm位で葉数50枚位、葉は斜上に着生する。木子の着生は少々少ない。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(11) えぞあか (岩宇7号)

来歴 「えぞあか」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「千草」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「783—2」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1965年(昭40)「岩宇7号」として特性と促成栽培の適否を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「えぞあか」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花型はすかしゆり型で上向、花色は赤橙色で花卉の斑点は少く、少々反転、花梗の長さは中位、花の大きさは中輪、蕾の毛は中位あり、草丈50cm位、葉数中位、葉色は緑で水平に葉を付ける。葉の巾はやや広く長さは中位。ボトリチスには花がやや弱いようである。

栽培適地と奨励態度 在来の「えぞ透ゆり」が片親であり、球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂質土及び火山灰土のような軽い土での栽培が望まれる。〔1979年(昭54)廃止〕

(12) えぞこがね (岩宇16号)

来歴 「えぞこがね」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「透百合(不明)」を父として交配、種子は、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜、「522」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1965年(昭40)「岩宇16号」として特性と促成栽培の適否を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「えぞこがね」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花型はすかしゆり型で上向、花色は黄橙色で弁先ややぼかし、花卉の斑点は中位、反転しない。花の大きさは少々中輪、花梗の長さは短い。蕾の毛は中位にあり、草丈50cm位、葉は緑でやや垂下、葉巾は中で長さは短い。

栽培適地と奨励態度 在来の(そぞ透ゆり)が片親であり、球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂質土及び火山灰土のような軽い土での栽培が望まれる。〔1979年(昭54)廃止〕

(13) 岩内黄金 (4503)

来歴 「岩内黄金」は、1966年(昭41)北海道立中央農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「3711(えぞ透選抜系統×新樺)」を母、「F系(金剛城×エンチャントメント)」を父として交配、1967年(昭42)温室播種、温室内で実生育成、1968年(昭43)圃場移植、1969年(昭44)開花、1970年(昭45)選抜、「4503」の系統名で育成、1971年(昭46)より中央農試にて特性、促成適否について検討した。1975年(昭50)優良品種に決定し、「岩内黄金」と命名した。

特性概要 1.開花が6月下旬～7月上旬、花色が濃黄色で花卉の斑点は少くすかし形で横向に咲く、草丈30cm位、葉はやや細目で水平に付き照葉である。茎は緑色で直立、珠芽は着かない。球根は白色で扁球形でやや小球、りん片の抱き合せは密である。木子の着生は少ない。促成栽培で8月上旬掘上げ、年内に開花出来る。ボトリチスにはやや強い。蕾の基部に淡褐色の色が付く、蕾の向は横向、色は黄色で早目に着色する。

栽培適地と奨励態度 道内で比較的軽い土壌(砂質土及び火山灰土)での球根栽培に適する。